

# 「マキノ式福祉実践人類史的考察」から福祉を考える

PandA-J No.13～No.15

特定非営利活動法人UCHI 牧野賢一

## 相次ぐ真面目な法人の人権侵害事件

私たちの福祉実践が、指導、援助、支援などという言葉の意味をめぐって、長い間喧々諤々と論じ合っていたかと思うと、瞬く間に「サービス」という言葉に置き換わっていました。そして、最近の現場は、「どうしてなんだろう」と考えなくても仕事ができるようになってしまったように思います。それは、やるべき私たちの「使命」と「方法」が新たな制度によって明確になったということなののでしょうか。

民間施設が中心となって、施設利用者の権利擁護に先進的に取り組んできた神奈川県で、その運動を支えてきた真面目な法人で、驚くべき人権侵害事件が、自立支援法施行後のここ数年立て続けに起こっています。

それらのなだれ現象を考えてみますと、利用契約、利用者本位、自立支援、個別支援、サービス管理などの言葉は、自明の理のように飛び交っていますが、措置制度を壊してつくられた新たな制度的言語は、あまりに性急であったために、上滑りを起こしているといえます。

措置制度という矛盾を抱えた「まとまり」は、その本質を鋭くえぐり取る当事者や地域実践の言葉によって時間をかけて「バラバラ」にされて、契約制度という新たな「まとまり」をつくる理念構築の原動力となりました。しかし、実践的言語の積み上げをしっかりと行わなかった、いわば本質を問うことなく下ろされた新たな制度的言語が、現場レベルでは胸に落ちずに、形式と実質に深い谷間をつくりだし、本質的な問題が見えにくくなってしまったことを、相次ぐ真面目な法人の人権侵害事件では物語っているといえます。

## 当事者とともに共通テーマとしての本質を探る醍醐味

障がい福祉の現場が、人の暮らしや人間の存在とは何かという、共通テーマとしての「本質」を問い続けなければ、かけがえのない「命」という観点から人権侵害に常に向き合う一人ひとりの心は失われます。厳しい時代を生きた脳性まひのある当事者は、「サービス」という名の下に、地域そのものの施設化が見えにくい形ですすんでいると語りました。

当事者ととともに「どうしてなんだろう」と悩み、当事者の声を手がかりに一緒になって、本質を問いながら、与えられた「まとまり」を「バラバラ」にして、新たな「まとまり」を積み上げていくことは、この仕事の醍醐味だと思います。当事者にたたき上げられることなく、新たな制度をあたりまえに受け入れるしかなくなった若い世代には、その面白さを伝えなければならないと痛感します。

## 私の福祉実践と本質を探る旅

15 年前、当時の通所施設としては先を行く就労支援を担当し、程なく社会に出た人たちが福祉から遠ざかるとすぐに孤立してしまうという現実には、彼らの本当の声を居酒屋で聴くことから就労援助付きグループホームとして、「下宿屋」の取組みが始まりました。

当時の地域にはグループホームも少なく相談支援もなかったので、トラブルや精神的問題を抱えて地域で孤立してしまった親子、社会的入所・入院の人、親から虐待を受けた人、犯罪を繰り返す人などのよろず相談を受けて、そうした人たちを積極的に受け入れることで制度としてのグループホームの役割をはるかに超えた地域生活支援を展開してきました。

そうした、制度の枠組みに納まりきらない人たちの支援は、当初はうまくいかないことの連続で、支援が上滑りしてしまいました。そんな中で、彼ら本当の声に耳を傾け、ともに悩み苦しみながら、人の暮らしとは何か、人は何のために生きるのかという、共通テーマとしての本質を探る小さなグループホームの模索が始まりました。

ある時、手がかりになったのは、私が学生時代に学んだ、実験考古学からアプローチする人類史という視点でした。その時代を生きた人々の心の世界を考えることから、人類は動物としての弱さ（競争性）を、安心・安定、移動、交流、表現、自己実現という関係性（共同性）によって克服してきたこと、人の人生はまさに人類史を辿るということ、人の暮らしは競争性と共同性のバランスの上に成り立っていること、それらに気づくことで、共通テーマとしての本質を探る旅は、これからの実践の重要な地図を見つけました。

## 福祉実践から本質というパズルを解く

福祉実践の現場には、人の暮らしや存在とは何かという、本質のパズルが散りばめられています。そんな中から、私の福祉実践のエピソードを二つ紹介します。

まだ若かりし頃、私の通所施設での最初の仕事は、養護学校卒業後の通所初日から家を出ることができない、重い自閉症のある人のお迎えでした。彼をあの手この手で施設に連れてくると、何かをきっかけに、抵抗、攻撃、破壊というすさまじいエネルギーを出し、無策の毎日の中で途方に暮れていました。「困ったときは山に聞け」とばかりに、山に入り浸った学生時代を思い出し、周囲の心配をよそに、他の利用者と施設を守るためという大義名分で、彼をおそろおそろ山に連れ出しました。

その時から、私と彼との関係は飛躍的に変わり、山での彼は施設にいる時とは別人のように穏やかで、何よりも私自身が穏やかな気持ちになりました。山での個別対応は回を重ねるごとにお互いの関係が深まり、目標にしていた登山や沢登りも、彼のペースで一緒に楽しみ、次第に言葉を越えたコミュニケーションができるようになりました。

そうしてしばらくすると、山での個別対応は必要がなくなりました。施設では彼の気持ちに立って私が環境調整をすることで、私以外の職員がかかわっても施設で落ち着いて過ごせるようになったからです。

もう一つは、グループホームでのこと。幼少期から親の虐待を受けて、障害児施設に保護された人を受け入れました。彼は言うことは達者ですが、他人に迷惑をかけてもどこ吹く風、面倒なことにはすぐに投げやりになりました。口癖は「オレなんかどうなってもいいから、ほっといてくれ」、入居後間もなく家出と触法行為を繰り返し、職場でも従業員を殴ったりと、す

ぐにクビになってしまいました。しばらく彼に振り回され、ホームではとても手に負えないと、関係者に集まってもらいました。

唯一かかわりのあった親族は、「親に似てどうしようもない奴だが、子どもの面倒をみることだけはうまい」と言いました。半信半疑で彼に確かめると、「本当はそんな仕事でしたかったけど言えないでしょう」と言いました。そこで、地域で子育て支援をしている方に相談すると、本人を子育てサークルのボランティアに迎えてくれました。私は初日だけ心配しながら様子を見ましたが、サークルに参加したばかりで慣れない子どもとの絶妙な距離や接し方、親への声のかけ方に目から鱗が落ちました。

なんでそんなにうまいのか聞くと、障害児施設で職員がいないときに、障害の重い子どもの面倒を見ていたからだと言いました。そうして、地域の人たちからありがたがられると彼は変わりました。高齢者の傾聴ボランティアもこなし、地域にも知り合いが増えて生活が落ち着き、そんな中で、知り合いの元暴走族だったクリーニング会社社長にお願いをして就職が決まりました。

それから7年、いろいろありましたが仕事は立派に続けて手に職もつき、ストレスがたまると近くのスナックで酔っ払って、地域の常連客との話しに花を咲かせています。

## 人類史からみえてくる本質

『下宿屋』（グループホーム）を始めてから、制度の枠組みに納まりきらない人たちの地域での暮らしを支えるということが中心になりました。その手さぐりの福祉実践に散りばめられる本質のパズルを、ある時現場からぐっと視点を引いて、大学時代に学んだ人類史を辿ってみたとき、謎解きのヒントを見つけました。

人類史を辿ると、人類の祖先で木の上で単独生活はじめた夜行性のサル（原猿）は、外敵がいない中で繁殖し縄張り争いが激化、それに敗れた弱いサルたちは木から降りなければならなくなり、生きるために「群れ」をつくり昼行性のサル（真猿）へ、さらに群れの多様化がすすみ、ヒトに近いサル（類人猿）へと進化しました。

群れを成した弱いサルたちは、いくつもの種に分かれましたが、そのうち、環境の変化などが要因で、生きるために二足歩行ができるようになったサルは、広い範囲の移動が可能になり、前足は手となり道具を作り、それによって脳は大きくなっていったと考えられています。そうして、約600万年前にアフリカ大陸で、人類への進化を遂げたのです。

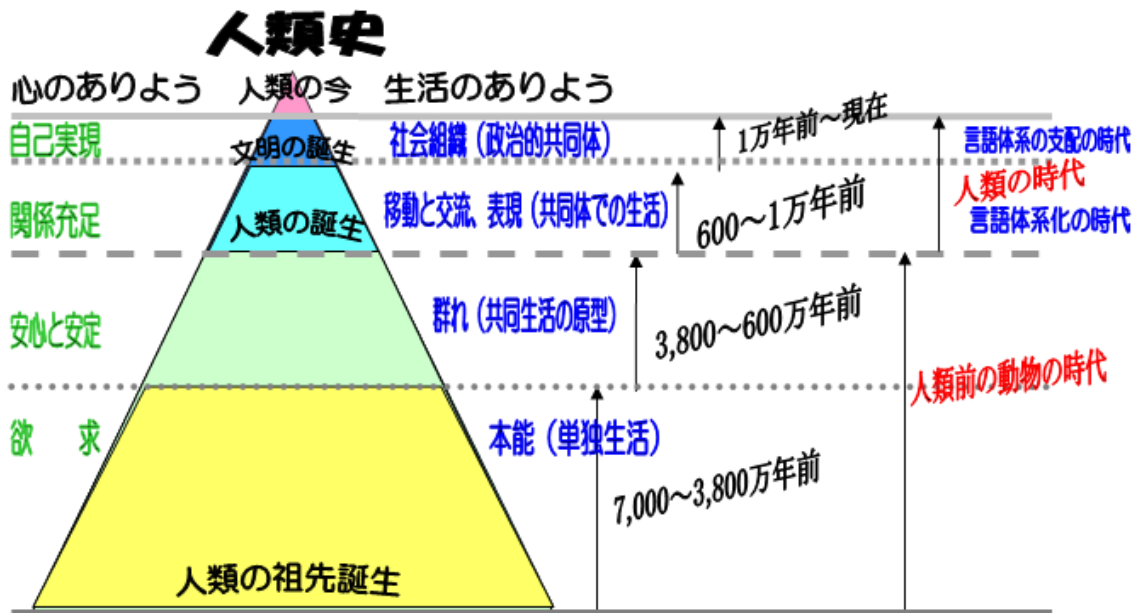
誕生した人類は多くの種に分かれ、アフリカ大陸からの移動をする種もありましたがすべて絶滅しました。そして、約20万年前に誕生した現生人類（ホモ・サピエンス）が、約10万年前には、アフリカ大陸から移動し、壮大な旅の末に世界各地に分布して、現存している唯一の人類、それが私たち人間なのです。

人類の祖先は、動物として弱くても「競争」の中を生きるために、群れという「共同」が不可欠になったといえます。弱い「競争性」によって生存が脅かされる強い「不安」を、それを補う「共同性」を獲得することによってもたらされる「安心」によって克服するという、ここに人間の本質の原型をみることができるのです。さらに直面したであろう困難に、「移動」をすることによって人類は誕生しました。

「移動」の先にあったのは、さまざまな出会いからもたらされる、「交流」であり、そこから生まれる「表現」の蓄積が、多くの暮らしの文化をもたらしただけでなく、人類はその誕生から約1万年前まではるか長い時間、大きな争いごともなく、理念なき「共生」時代を経験

していると考えられます。

しかし、農耕・牧畜文化によってもたらされた「文明社会」は、富と権力による支配の中での「争い」と「差別」、「貧困」をもたらしました。それによって人間は、抑圧から解放されて、誰もが豊かに暮らせる「共生社会」という理念を掲げ、一人ひとは社会の一員として、自分らしく生きる「自己実現」をしなければならなくなったといえます。



## 人の人生はみごとに人類史を辿る

生まれたばかりの子どもは個体としてはとても弱く、生きることの「不安」を抱えますが、家族に支えられる「共同」によって守られ、「安心」して生きていくことができます。そうした、身近な相手との関係からもたらされる「安心と安定感」が人の心の基盤をつくると考えられます。

やがて、家族に守られながら成長して、這い這いから自分の足で歩き始めると、自由な「移動」が可能になり、身近な相手以外の誰かとのさまざまな「交流」の機会が増えてきます。それによって誰かに自分を「表現」し、そのことで誰かとの関係を広げ、その蓄積が心の中の「関係性の充足感」をもたらし、大人へと成長していきます。

そうした「安心と安定」を基盤とした「移動」による、「交流」と「表現」の蓄積によって、社会の現実（競争）をさまざまなつながり（共同）のなかで生きていくための準備が整い、その人らしい暮らしを「自己実現」するのです。

## 本質を踏まえながら福祉を考える

しかし、障がいがあることによって、「競争」と「共同」のバランスのなかで生きていくことが難しくなってしまいます。障がいのある人にとっての「安心と安定」は、身近な相手との関係における支えを、より多く必要としますが、家族だけではうまくいきません。

そして、社会への「移動」が困難であると、「交流」の機会は極端に少なくなり、その人の「表現」は限られたものになって、身近な人以外の誰かとの関係を広げることができなくなってしまいます。

社会の現実（競争）を生きるための支え（共同）が備わらない状況では、社会の現実から遠ざけるための「保護」による、閉じた中での「安心と安定」が助長されます。それは人類史で考えるならば人類進化以前の「移動」しないサル段階に留めてしまうことになりかねません。

障がいのある人の暮らしを考えると、社会の現実（競争）に見合った、地域の支え（共同）を確保することが重要で、「競争性」と「共同性」のバランスの中で生きるという人間の本质から、私たちの福祉が離れてしまってはならないと考えます。

私たち人間は、動物としては弱くても、とりまく厳しい現実（競争）を生きていくために、支え合う（共同）ことを手にして、さらに、「移動」と「交流」「表現」の蓄積の中で、暮らしの「自己実現」をしながら、後世に向かって生き続けてきた唯一の生命なのですから。

## 人類史から導かれた「関係支援」

人類は「競争性」（動物としての弱さ）を補う「共同性」（支え合う関係性）を構築する長い時を過ごし、やがてその二つの性質の間（あいだ）に「自己」という意識がつくられたのではないかと考えてみました。その「自己」を生み出す要因は、動物としての弱さからくる生存「不安」であり、支え合うことを維持しなければ生きられない関係「不安」であったのではないのでしょうか。

この、人間だけが持ち合わせる二つ性質の間につくられた「自己」は、人間につきまとう「不安」を克服するために、やがて、「競争性」と「共同性」を統合するシステムとしての言語や社会組織をつくり出しました。そして、文明誕生以降、その統合バランスによって人は生かされも殺されもする、歴史的経験を積み重ねながら、現在に至っているといえます。

## バラバラになる力とまとまる力

「楽しいことなどなにもない」「何のために働くのかわからない」「居場所がどこにもない」、「何かに追われるのはもういやだ」、「死にたいけど死ねない」という、地域社会で孤立した人たちの体験的言語から、障がいのある人の「生きる力」に周囲が過剰期待し、「競争性」に偏った「自己責任論」の中で、当事者の「自己」は強い「競争性」に埋没して、「自分が殺されてかろうじて生かされる」という心の叫びがきこえてきます。

一方で、「（障害者）施設は無期懲役の監獄」「施設は殺さない程度に生かす」「施設にいたころ IQ 測定不能、地域に出てから頭が動き出した」「施設は常識を何も教えなかった」、という、入所施設で長く暮らした人たちの体験的言語からは、障がいのある人の「生きる力」を過小評価し、「共同性」に偏った「入所施設」という仕組みをつくり出し、そこでの当事者の「自己」は強い「共同性」に埋没し、「かろうじて生かされるが自分は殺される」という心の叫びがきこえてきます。

そして、「競争性」と「共同性」のバランスを崩して、より過酷な状況を幼少の身から生きなければならなかった虐待を受けた人たちは、「自分なんてどうなってもいい」「わかってくれる人などいないから、ほっておいてくれ」という、バラバラになろうとする力と、相反する「自

分をしっかりとみてほしい」「追いかけてほしい」という、まとまろうとする力が、激しくぶつかり合う心の叫びがきこえてきます。バラバラになろうとする衝動は、人間の持つ「競争性」であり、動物としての弱い「競争性」は、人はひとりでは生きていけないから、まとまろうとする衝動に駆られる、それが人間の持つ「共同性」であり、その中で自己を確認しながら生きる人間の本質を、障がいのある当事者は伝えてくれます。

## 「競争性」と「共同性」の間にある「自己」を支える

人間は、「競争性」と「共同性」の間にある「自己」を確立することで、これまで生きてきた自分が将来に向かってすすんでいく、意味のある存在であるという確信を持つことができます。そのことを支援するのが「関係支援」の核心です。

関係支援は、人類史によって構築された「競争性」を補う「共同性」の要素である、「安心・安定」、「移動」、「交流」、「表現」、「自己実現」の視点から、その人の「これまで」をその人の言葉によって確認し、「これから」には何が必要かを一緒に確認します。その先の段階では、「自分史作成」として、形にしていく支援を行います。(次回で説明)

関係支援において支援者は、次のような基本的姿勢で、当事者との関係を構築していきます。

1、「話を聴く」＝言葉を聞くことだけではなく、表情、しぐさ、かもしれない雰囲気など、その人固有の表現の根っ子にある「心の声」を聴く。

2、「受け止める」＝「心の声」を聴くことは、すなわちその人を「受け止める」という姿勢。その人にしっかりと向き合うことと同時に、支援者が自分自身を見つめ、「これでいいのか」という意識を持ちつづける。

3、「伝える」＝その人をその時点ですっぱり「受け止める」なかで、こちらの思いをわかりやすく伝える。その人が中心となって問題に取り組み、解決していくためにその時点で何が必要かを一緒に考える。

そのような基本的姿勢の中で、五つの視点から次のような支援を行います。

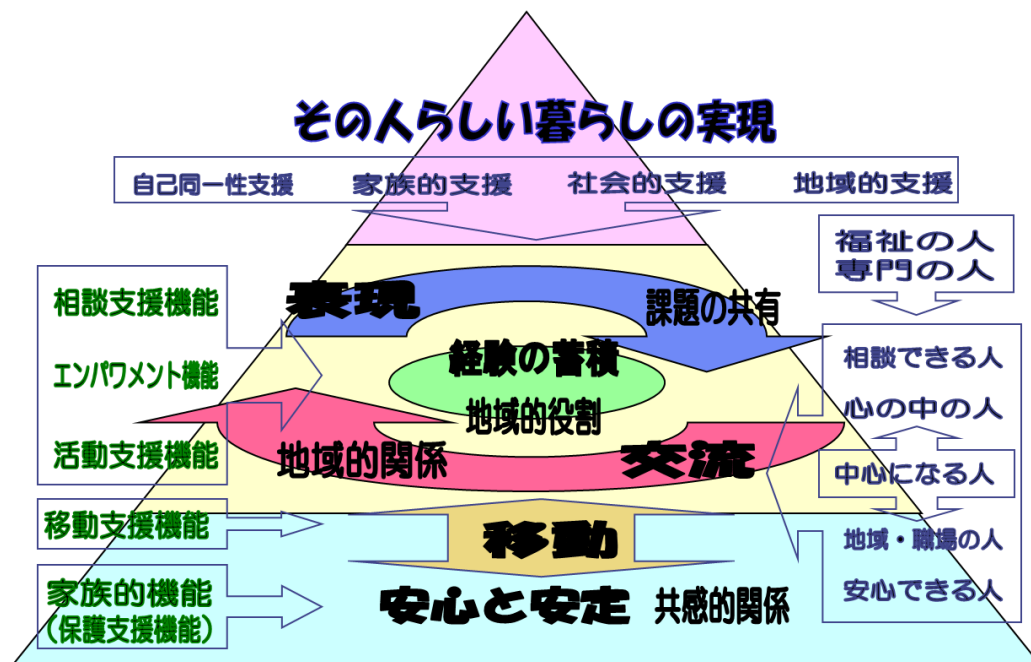
1、「安心・安定を支える」＝「話を聴く」「受け止める」「伝える」という基本的姿勢から当事者との共感的関係をつくり、それが家族以外の他者との関係による「安心・安定」になるように支援する。人との関係による「安心・安定」が、その人らしく生きていくことに向かっていく、すべての基礎になる。

2、「移動を支える」＝その人が望む「ひと・もの・こと」との出会いのために、「安心」して「移動」することを支援する。「移動」が、地域・社会との「つながり」をつくるきっかけになる。

3、「交流を支える」＝「ひと・もの・こと」との関係をつくるために、さまざまな活動のなかで、その人らしい「交流」をすることを支援する。「交流」が、地域・社会との「つながり」をつくる。

4、「表現を支える」＝地域・社会との「つながり」のなかで、一人ひとりがありのままに受け入れられるために、その人らしさを「表現」することを支援する。「表現」が、地域・社会での課題の共有につながる。

5、「自己実現を支える」＝地域・社会との「つながり」のなかで、その人らしい暮らしを営むことの「自己実現」を支援する。「自己実現」は遠くに設定されるゴールではなく、日々のなかで自分らしく暮らしているという「実感」の積み重ねである。



## 障がいのある人によってもたらされる地域・社会づくり

関係支援によって、障がいのある人も、地域・社会の一員として、その人らしい暮らしを一つひとつ実現していく中で、「障がい」は、当事者や家族だけの課題ではなく、地域・社会の課題として受け止められ、その課題の解決に向けた地域的・社会的役割が広がり、障がいのある人を包み込むような地域・社会の枠組みへと広がっていくと考えます。

障がいのある人の「生きにくさ」の課題を、地域・社会が受け止めて解決していくことは、障がいのある人のみならず、すべての人にとっても暮らしやすい地域・社会づくりになることを確信して、障がいのある人、一人ひとりの支援に取り組むことが、私たちの福祉実践共通の使命であると考えます。

